

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 臨床・健康教育学系 助教

氏 名 大宮 宗一郎

研究期間 令和3年度

研究プロジェクトの名称	教員がシステム論的家族療法を学び、子ども支援を行う意義について -質的分析に基づく検討
研究プロジェクトの概要	<p>学校では、いじめ、自傷行為、不登校、非行などの同時多発的に発生するトラブルに対して組織的な対応を行っている。「組織 (=システム)」とは、「個人」が集まっただけのものではなく、「個人」の組み合わせ次第でさまざまな特徴が生み出されるため、学校における支援では、子どもの理解に加えて、学校組織の特徴を考慮する必要がある。</p> <p>家族療法のなかでも、とりわけシステム論的家族療法は、支援場面に登場する人物の特徴に加えて、登場人物間に生じる相互作用をアセスメントして支援を行う援助技法である。吉川ら (2019) は、従来の個人療法の考え方のみでは、学校現場で生じる問題に対処しきれないことを指摘するとともに、システム論的家族療法が、学校における有効な支援技法の 1 つであるとしている。学校では子どもや子どもを取り巻く人間関係などを熟知する教員が、子どもの問題にいち早く気づき、初動対応を行っている。したがって、教員がシステム論的家族療法の視点を踏まえて学校組織の特徴を活かしながら子どもの問題に対する初動対応を行うことができれば、問題悪化の予防や早期の問題解決だけでなく、学校組織に適した予防対応システムの構築にも資することが期待される。そこで、本研究では、教員がシステム論的家族療法の理論を学び、学校現場で活用する意義について検討を行う。</p>
研究成果の概要 ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	<p>私たちの研究チームは、システムズ・アプローチの視座に基づく事例検討会を月 1 回の頻度で行っている。事例検討会では、参加者から事例を募り、事例提供者の困りごとについて検討している。</p> <p>今年度は、研究プロジェクトの研究費の採択時から計 7 回の事例検討会を行った。事例検討会を行うことの意義については、2021 年度家族療法学会のシンポジウムで報告した。</p>
研究成果の発表状況	2021 年度家族療法学会のシンポジウム「小学校教員が家族療法的視点を学校現場で使ってみた」で発表した。
学校現場や授業への研究成果の還元について	2021 年度家族療法学会のシンポジウムでは、事例検討会で得られたシステムズ・アプローチの視座に基づく支援を学校で実践することで、子どもの支援に役立つだけでなく、養育者の安心感や、教員の生徒対応への自信につながっていることが報告された。つまり、本研究の取り組みは、 学校に関わる教員、子ども、そして養育者にとって好影響のある取り組み であると考えられた。